

意外に面白かった。著者の子ども時代に野山で体験したことが、一部自分の経験もあるので、共感できる。オトギリソウ(弟切草)、ワルナスビ(悪茄子)、ヘクソカズラ(屈糞蔓)・・・変な名前
エノコログサ(狗尾草)、絶滅危惧種オナモミ、・・・懐かしい
ネナシカズラ(根無蔓)、ヤドリギ(寄生木、宿り木)・・・ほー。

カタクリ

早春に、いっきに葉を伸ばし、花を咲かせるとともに林床に差し込む日光を浴びて栄養分を鱗茎(りんけい:地下にある球根に似た塊)に蓄える。周りの木々が新緑に覆われるころには地上部は枯れ、来春までの長い休眠に入る。およそ1ヶ月間で生活活動のすべてをやり終える短期勝負を行っていると言える。蓄えはわずかなため、種子から成熟して開花するまでには10年近くもかかる。幼少期の長い植物でもある。片栗粉はこの鱗茎から採った良質なデンプン。ユリ科の多年草。



スミレ

花の後ろに長く伸びた距(きょ)があり、距に蜜がたまるようになっている。蜜を吸いにきた虫の刺激を受けると雄しべから花粉が出て、虫に付く仕組みになっている。



クワ(桑)

雌雄異株(しゆういしゆ)なので「桑の実」を付けるのは雌株だけ。初夏に熟して艶やかな赤黒色に熟したものを「どどめ」と呼ぶ。今風には「マルベリー」と言う。



オトギリソウ(弟切草)

名前のいわれを調べていくと、平安時代に、晴頼(せいらい)という鷹匠(たかしょう)がこの草を素にした秘薬で鷹の傷を治していたが、ある日、人のよい弟がその薬草の名を他人に漏らしてしまい、これを知った晴頼は怒って弟を切ってしまったという伝説から「弟切草」と呼ばれるようになったとのこと。

名前は怖いが見た目は可愛い植物である。茎の先端部に鮮やかな黄色い花を次々に咲かせる。

ワルナスビ(悪茄子)

ワルナスビは野菜のナスにそっくりの雑草である。繁殖力が旺盛な上に、全草にソラニンという有毒な物質を含み、茎や葉には鋭い刺を持っている。このため、家畜に被害を与えたり、農作業の邪魔をしたり、作物の品質を低下させたり、さらには作物のナスやジャガイモなどの害虫の温床ともなっている。

地下茎を伸ばして瞬く間に大きな群落になる。トラクターで鋤き込むと、切切れた地下茎から芽を出してかえって増殖してしまう。たちが悪い雑草として農家からは嫌われている。名前は「悪茄子」である。



ヤマユリ 神奈川県「県の花」

ヘクソカズラ(屈糞蔓)

不幸にして変な名前が付けられてしまったのは人に好まれない臭いがあるからだ。

花は、白と赤の配色にピロード状の細かい腺毛が密生やしていて、可愛らしさでは他に引けを取らない。また、果実は晩秋から初冬にかけて光沢のある金色の石果となり、飾り物のリースの材料に重宝されている。ちなみに乾燥した果実は臭いはない。



エノコログサ(狗尾草)

エノコログサは「いぬころ草」の意味で、穂の形が子犬のしっぽに似ているからであると言われている。「ネコジャラシ」と呼ばれることもあり、この穂で猫をじゃらして遊んだことのある方がいられるのではないかと。耕作地、空き地、道ばたなどに生え、夏から秋にかけて普通に見られる。

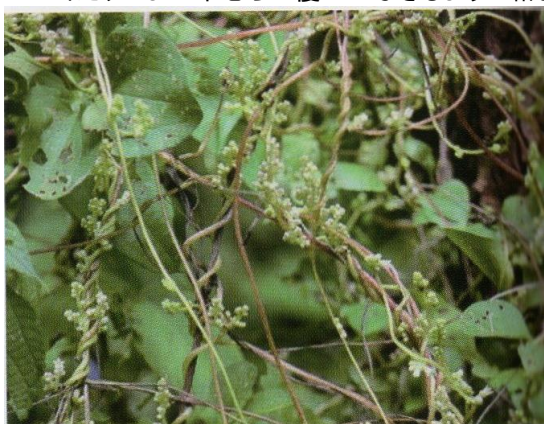


ネナシカズラ(根無蔓)

ネナシカズラは、文字のどおり根のない葛(つるのこと)である。また、葉もないので、「根も葉もない」植物である。ことわざにある「根も葉もないわさ」ではなく本当のことだ。

発芽したときには根を地中に伸ばし、茎は紐のように長く伸びて寄生する植物を探す。近くにある植物にからみつくと、宿主の茎に寄生根を喰い込ませ、宿主から栄養分を吸収する。やがて自らの根は枯れ、根なし蔓となる。

宿主となる植物にはヨモギやクズなどがある。
日当たりのよい草むらに覆いかぶさるように絡まっている。



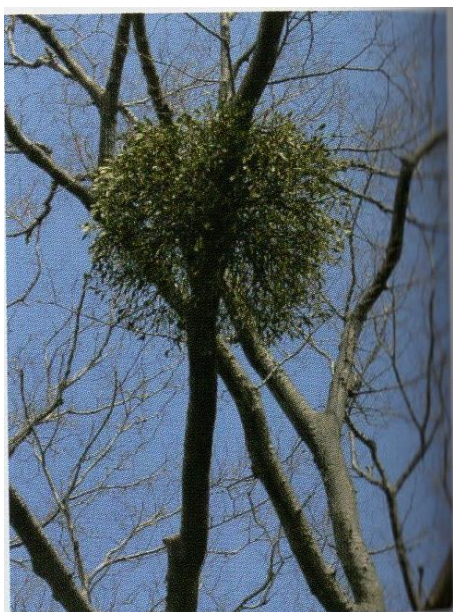
くす玉のようなヤドリギ(寄生木、宿り木)

筆者は1種類1点を目標に植物を採集し、押し葉標本を作っている。始めて40年以上になるが、ヤドリギが長い間採集できないでいたが、数年前に強風のため落ちた葉を3枚拾いようやく標本にすることができた。自生している場所は何ヶ所か知っていたが、どれも大きな木の高所であって手が届かないのだ

ヤドリギはケヤキ、エノキ、サクラなどの巨木に取り付いていて、これらの樹木の生きた組織に寄生根を侵入させ水や養分をもらって繁殖している。冬、落葉して見通しが利くようになった樹木の高い枝に緑色のくす玉のような植物が見られるのが本種だ。

冬場になると、野鳥のキレンジャク、ヒレンジャクなどが実を食べに来ることは知られているが、種子は粘液質に包まれているため、野鳥の糞として排出される種子は粘液の糸を引いていて、宿主に貼り付きそこで発芽して寄生が始まるようだ。

「寄生木」は、寄生する植物の種類や形を問わず全て広義の「ヤドリギ」となるが、種名の「ヤドリギ」は本種(学名 *Viscum album* subsp. *Coloratum*)のことを指す。観察は冬場が適期なので、神社や段丘崖のケヤキに注目して見上げてみて欲しい。



ハシブトガラスとハシボソガラス(烏)

身近でよく見かけるカラスには「カアーカアー」と鳴くものと「ガアーガ

アー」と鳴く2種類がいるのはご存知でしょうか。写真の左がハシブトガラスで鳴き方は前者。額が高く名前のおり嘴が太い。右の2羽がハシボソガラスで鳴き方は後者。額が低くクチバシは細い。



ニホンザル群団

厚木・愛川・清川周辺のニホンザルの個体群は、鳶尾群、経ヶ岳群、煤が谷群、川弟群、半原群、ダムサイト群やこれらの分裂群がそれぞれの地域を縄張として生息している。人里に近い地域の群れほど人との接触や追い払われる機会が多いためか、**人に対する威嚇や攻撃的行動が多く危険**である。



アゲハチョウ(揚羽蝶)

アゲハチョウはミカンやサンショウ、ユズなどミカン科の植物の葉を食草としているので、これらを目当てに観察をするといい。幼い幼虫は黒と白がまだら模様となっていて野鳥の糞に擬態している。4回の脱皮を繰り返して終齢幼虫になると、頭の大きな緑色をした柔和な顔つきの幼虫になる。同じ幼虫とは思えない姿に変身する。

筆者は子供のころ、葉を食べつくしたサンショウの枝にとりついている幼虫を突いて怒らせ、黄色い角を出すのを楽しんで遊んだ記憶がある。

うつむいて咲くホウチャクソウ(宝鐸草)

宝鐸(ほうちやく)とは寺院の建築物の軒先の四隅に吊り下げられた飾りのことである。茎の先端に長さ2cmほどの花が垂れ下がって咲く様子が宝鐸に似ていることから名づけられた。



ちなみに、園芸種のソメイヨシノは雑種起源の種(しゅ)で**不稔性**(種子ができない)のため、接ぎ木や取木で繁殖させていることから全ての樹の遺伝子が同じで、個体変異は起きない。このため同じ花が同じ時期に開花し、絢爛豪華に咲き誇るというわけだ。

不安定な大気

気象予報士が、「大気が不安定」なので「ところにより雷雨や突風、雹(ひょう)があるかもしれません」と言った予報をすることがある。大気が不安定とはどういう状態なのだろうか。「上空に寒気が入り、」南からは暖かく湿った空気が入り込む」と、その理由が述べられる場合もありますが、寒気や湿った空気が起こす現象についてまでは解説されません。

写真では、晴れているがモコモコとした発達中の雲があちこちにあり、大気が上下に入り乱れている状態にある。温まった空気は膨張していて密度が小さく軽い。また、寒気は収縮しているため密度が大きく重たい。上空の重たい空気と下層の軽い空気が接すると、空気が上下に入れ替わろうとする。その結果、暖気が上昇していくと上空は温度が低いので暖気に含まれていた水蒸気は凝結して雲ができる。湿った空気ほど潜熱(せんねつ 水蒸気が水になるとき発生する熱)によって上昇力がつき積乱雲など雨雲を発達させやすい。一方、雲の切れ間では寒気が下降していて下層の暖気と入れ替わっている。こうした状態を「大気が不安定」と言う。どこで上昇、下降するかは特定できないので「ところによって」となる。不安定な空模様では雷雨や突風など荒れた天気になりやすい。



有害雑草オオオナモミ

オオオナモミの果実には、先がかぎ状に曲がった多数の棘(とげ)と、果実の先端付近にやや大きなくちばし状の棘2つがある。これらの棘によって動物の毛や人の衣服にひっつくため、マジックテープと同じ原理ですぐには落ちない。動物を利用して果実ごと種子を遠くに運ぶための有効な手段となっているのだ。また、子どもたちが野外でこの果実を投げ合って互いの衣服にくっつけあう遊びも、種子の散布に一役駆っていることになる。

北アメリカ原産で、その旺盛な繁殖力によって在来の植物の生育を妨げたり牧草地や農耕地へ侵入して有害雑草となったりと農家には歓迎されていない。外来生物法によって生態系被害防止生物に指定されている。また、日本生態学会によって日本の侵略的外来種ワースト100にも選定されている。

キク科では珍しい雌雄異花で、風媒花でもある。同じ仲間のオナモミは古くから日本にある在来種で、こちらは生育環境の変化などから著しく減少し、めったには出会えない絶滅危惧種になっている。



~~~~~

表 4-1. オオオナモミとオナモミの形態的な違い

|    |     | オオオナモミ                        | オナモミ                                |
|----|-----|-------------------------------|-------------------------------------|
| 果包 | 付き方 | 数多くの果包が接しながら付く                | 果包は少なく、互いに離れて付く                     |
|    | 大きさ | 長さ1.8~2.5cm、幅1.0~1.8cmで、熟すと褐色 | 長さ0.8cm×1.4cm、幅0.6~0.8cmで、熟すと黄緑~灰褐色 |
|    | トゲ  | 密にはえ、長さ3~6mm                  | まばらにはえ、長さ1~2mm                      |
| 葉  | 葉   | 多くは3裂し、葉縁の鋸歯は尖る               | 葉はやや大きく、3~5裂し、葉縁の鋸歯は尖らない            |
|    | 葉柄  | 植物体が成熟すると褐紫色になることが多く、断面は五角形   | 淡緑色で、植物体が成熟すると断面は三角形                |
| 茎  |     | 植物体が成熟すると褐紫色になることが多い          | 淡緑色                                 |

オオオナモミとオナモミの形態的な違い = 農研機構畜産草地研究所提供

~~~~~

一目で見分けるには株立ちしないのがオギ、種子の付根から出ている白毛に混じて1本だけ長い苳（のぎ）があればススキ

雪虫

季節を告げる生きものは沢山あるが、初冬のころ、曇りがちで寒く風の無い日には雪虫（ゆきむし）が飛ぶ。この時期ならではの風物詩だ。

雪虫という呼び方は主に北国での呼び名で、地方によって様々な呼び名がある。井上靖の著書に「しろばんば」というタイトルの小説があるが、雪虫のことで、井上靖が育った伊豆地方では「しろばんば」と呼ばれているそうだ。愛川・清川では綿虫（わたむし）と呼ばれることもあるようだが、筆者が子どもの頃は「しいらんばんば」と呼んでいた。

